

平成22年度本会員活動方針

財務省主計局主計官 神田 真人

1. 大宇宙は余りに雄大であり、我等の大地、地球は余りに小さい。その宇宙の起源も自らの生命の本質も不可知であり、人類の知は無に等しい。その儂い人間が、小さな地球の38万キロで頑張っただけでここまで築き上げてきたのがこの現代日本である。感謝すべきであり、誇りをもってよい。

その国が、かつてない危機に瀕している。人口減少、国際競争力の衰退、未曾有の財政赤字、外交プレゼンス喪失、治安悪化、教育劣化と枚挙に暇がない。

世界の諸分野のリーダー達に本音を聞くに、我が国は、政治外交において存在感がないか嘲笑の対象であり、経済において、市場として無視されるか、グローバルリスク(特に日本国債の崩壊)の発信源として警戒される存在と認識されることが少なくなかった。昨年、海外赴任から帰国する際、各界の米国人の方々から、何で将来がない日本に帰るのか、こちらに残れ、と有難くも日本人としては寂しい御助言を頂いた。確かに日本の客観的状況は厳しい。

もっとも、しっかりした知的空間があれば、今は駄目でも創造し、議論して立ち直っていける。だから、何よりも深刻なのは、物質主義、刹那主義、利己主義に墮し時代精神が劣化していることである。長期的、多角的、抽象的な思考に耐えられず、そのような議論をする知的空間が蒸発しつつある。難局を弁証法的に昇華していくためのプロセスが見いだせない。知性への抑圧は文革時代の中国かクメールルージュのカンボジアから物理的暴力を取り去っただけという人さえいた。衆愚を煽るマスコミと沈黙していく知識人の光景は戦前の我が国やワイマールと酷似している。

また、社会の個々人がプロ意識をもって切磋琢磨していれば、もっと活力が高まり、競争の中から活路も見いだせようが、どうも、他力本願で、自信なさげな虚無感が漂っている。会社のリスク回避傾向をとっても、若者の資格志向、内向き思考をとっても、政治家の大衆迎合をとっても、自分の人生や職業への誇りと義務感が相対化の中で極小化されてきている。これも諸外国との大きな違いだ。

しかし、我が国の既存の秩序が溶解し、国際システムも流動化しているということは、即ち、変化の機会にも恵まれているということに他ならない。少し前までの内外の硬直的世界の閉塞感を思えば、苦しくても面白い時代に巡り合えたものである。学問の方法論においてさえ新たなパラダイムを模索する状況にある。努力すればよくなる好機がきた。しかも、まだまだ、スポーツをはじめ、様々な分野で人類の進化に貢献している日本人が多々いる。芸術であっても、本質的なものが成功する土壌が辛うじて残っている。追いつかれつつあるとはいえ、最先端の技術や研究も少なくない。普通の水準まで知的空間を回復し、ひとりひとりがプロとして自覚し尊敬しあえば日本は未だ闘える。

2. そのような中で、我々は何をやっているのか。浩志会員は謙虚でディーセントな一市民であるべきだが、それだけに止まって責務が果たされるのか。

我々は、沢山、不満をもっている。当然だ。しかし、客観的にはその境遇に感謝すべきである。たまたま、日々死と向かい合う最貧国ではなく豊かで平和な現代日本に生まれたこと、たまたま、親や教師に恵まれて、教育の機会を享受し、俗世的には立派な組織に入社、入省できたこと、そして、今、この素晴らしい仲間に出会える浩志会に入会していること、今日までに受けてきた幸運を振り返ってみよう。血涙の不幸な体験もあったし、必死の努力もしたに違いない。でも、世界70カ国を歩いてきた小生の視座からみれば、皆さんの位置づけは明らかだ。ノーブレスオブリージュのような言葉は今回は敢えて使わない。しかし、浩志会員のような存在がその幸運を社会に還元することなくしてどうして、良い

社会を維持し、次世代に引き継げようか。

危機感、問題意識を高め、共有しよう。しかし、愚痴におわるのではなく、前向きに前衛に立とう。流動化の中に好機あり。よく勉強し、議論し、仲間を増やしていけば、破局を回避し、きつともっといい社会が作れるはずだ。

心配しないで欲しい。何も大袈裟なことをいつているのではない。ましてや政治活動などを示唆しているのでは全くない。全く逆だ。寧ろ、極めて地道で、しかし持続可能で、自然と広がるような営みだ。志は高くとも、戦時の無謀で無責任な精神主義では決してない。ひとりひとりが、人間に潜在するはずであり、人間の条件であるはずの知的好奇心や公共心呼び覚まし、失われた知的空間を取り戻すことを、まずは浩志会、そして、家庭、職場、様々な地域等の共同体に広げていくだけのことだ。古今東西、文明に存在する普通の世界にするにすぎない。

蓋し、最小限の知的空間が確保されれば、殆どの問題は解決する。卑近な例をあげよう。小生の今の仕事のひとつは、危機的状況にある財政を立て直すことである。サービス(高度な社会保障等)は欲しいが対価(税金)は払いたくないという大衆の情念を政治が抑制できず、世界で類をみない今日の惨状に至った。この解決には難しい財政理論は不要である。また、本来望ましい倫理の共有さえ不可欠ではない。仮に最小限の倫理も期待できない最低の利己主義者であっても、今日だけではなく、少しだけ先のことを計算して、借金地獄では自分や自分のこどもが破滅する、という常識的な時間軸(中長期効用関数)をもってくれば、或いは、経済社会が壊れれば、治安が悪くなり自分も不安に怯えて生きるしかないし、食糧やエネルギーも輸入できなくなる、といった原始的な想像力さえもってくれば、自動的に解決するはずだ。ビジネスもそうだ。天才的な経営者でなくても、ちょっとでも長期的、広域的な視座をもってくれば、人口が単調減少し、高齢化で貯蓄率が負となっていく国内市場にしがみついているは少なくともじり貧であることは明らかである。同業他社をみるのではなく、世界を鳥瞰し、ちょっとしたリスクをとるだけでかつてない可能性が広がっている。

そして、浩志会員のような存在がこの作業に関与していく橋頭堡は、実は、自分の職場の仕事でよいのだ。私自身、誰よりもスポーツや芸術、旅行といった趣味を大切に生きてきたつもりであるが、仕事にこれだけ時間を費やしている以上、これと全くシナジーのないやり方は会員のインセンティブにも欠け、長続きしないと思う。また、仕事は知的判断、知的コミュニケーションの連続であり、その経験の蓄積は人生哲学や社会観の肥しとなる。このプロセスを保障するアンカーはプロフェッショナルリズムと考える。プロとしての誇りと研鑽なく、単に組織の歯車になっていたり、不満分子になっていては、社会への貢献どころか組織のお荷物にすぎない。プロ意識をピアプレッシャーで高めあい、再生産していくことにより、知的空間の再生につなげることに、浩志会の存在意義との親和性を見出せる。なお、プロというとき、職業に貴賤や上下はない。社長と清掃業務員の間に、職務の重みの違いこそあれ、社会に不可欠ということにおいて違いはない。親による子育てという最も尊い仕事も含まれることはいうまでもない。

日常において、地道にプロフェッショナルリズムを覚醒させつつ知的空間を再生していく。その身近で貴重なインストルメントが浩志会活動に他ならない。まさに、幅広く勉強し、多様な方と議論し、仲間をクリティカルマスに増やしていく。先輩達が築き上げ、鍛え上げてこられた浩志会の素晴らしい伝統を大切に、更に前進していく。

3. 全体テーマ 「日本はまだ闘える ―プロ意識の覚醒と知的空間の再生―」

そう、日本はまだ闘える。そして、我々は、その志において高く、姿勢において控えめな前衛でなくてはならない。活動方針は、持続可能であるためにも、足元の仕事のプロ意識に着目しつつ、本質的かつ波及力の高い社会貢献として知的空間再生を打って出る砦となるものである。その具体的手法は可能な限り、各グループや各会員の自由な発意に委ね

られる。一番大切なのは楽しいことである。楽しければ活動も長続きする。知的空間再生といっても、浩志会の知的濃度が高まり、そして、各会員の職場や家庭で少しでもまじめな議論の機会が増えれば、それだけでも素晴らしいことである。

そういった大前提のもと、以下に具体的な活動方針を記す。本会員の多忙さを踏まえ、最小限のものに絞り込ませて頂いた。

(1) 我々は天才ではない以上、謙虚に歴史や哲学から学ばなくてはならない。激動の中でこそ、答えのみえない流動化の中でこそ、時間に耐えてきた英知が羅針盤を与えてくれる。この秘訣を忘れては、進化は止まる。知的空間を形成する主体になるためには、勉強を続けなくてはならない。各自が毎年、最低百冊は読むことが望ましいが、小生から何を讀もう、何冊讀もうといった傲慢なことは申さない。しかし、ささやかな誘因として、各グループが自由に選んだ何冊か(1年間で1冊でも結構)、パン学問でない歴史書、哲学書、古典文学乃至理論書を読む機会を共有し、一度は懇親会ででも議論して頂き、1冊に対するグループ会員の書評を簡単でよいので各グループ活動報告に入れて頂きたい。

(2) 我々は英雄でないし、大衆民主主義、グローバル市場主義の中に浮遊している。1人では何もできない。また、複雑なシステムにおかれた組織や個体は、外部の刺激を得て成長し遅くなり、また、その意思を実現できる。浩志会はその意味で極めて恵まれている。官民を超えて多種多様な組織から選抜された人々の集いであり、こんなに効率的な場はない。是非、更に広く、深く仲良くなって欲しい。そのための環境を作るのが幹事団の重要な仕事であり、幹事達が頑張って展開する様々な活動を十分に活用して頂きたい。グループ活動についてはその誘因として、決して自己目的ではないし、在京比率等グループ会員構成の属性を勘案する必要があるが、各グループの参加度調査は本年も継続される。各グループにおかれては、毎月の企画への参加を通じ、それぞれが有意義な研鑽を積むと共に、研究会フォーラムのように、楽しい思い出と長続きする友を増やして頂きたい。

(3) グループ活動自身は地道であることが持続可能性につながる。楽しく斬新な企画を自由に展開していただければ大歓迎である(革新的な実験の成功があれば、グッドプラクティスを全体に広めたい)が、いつも無理する必要はない。ビッグネーム招聘等は、幹事団にご示唆頂ければ、他の多様な浩志会の活動で拾い上げられるかもしれないし、グループ合同企画にして頂いても良い。寧ろ、会員を講師にして気軽に学び会ってほしい。本会員は社会で20年以上、修行を積んできた。照れずにプロとして誇りをもつべきである。一見、本人にとって些細な会社や役所の話でも、必ず、社会に、政策に、ビジネスに何らかの含意がある。巧く、より大きな社会命題と結びつけながら、堂々と自分の仕事を開陳し、社会や市場の認識や革新的な手法を共有したり、悩みをぶつけ合えばよい。自らのプロフェッショナルリズムを見つめなおす機会になるはずであるし、議論の中で大きな構造変化を発見できるかもしれない。地に足のついた実学は強く、社会改革の支えとなっていく。他方、我々がプロの自覚と誇りを失えば、これまでに社会が投資してくれたことが無駄になってしまう。

(4) そして、浩志会の勉強で培った知性と志を武器に、それぞれが自分のできることを外で実践していく。皆、政治が駄目だ、マスコミが馬鹿だ、というのが、選挙民も視聴者も国民。私が担当する教育や科学技術の世界でも、親や先生が駄目だといわれるが、それこそ国民そのものであり、次世代の親や先生もそこから再生産される。この鶏と卵において魔法解はなく、王道は、各々のリーチでささやかな努力を重ねることである。時に憂さ晴らしも必要であるが、愚痴を言いあうことには飽きた。否、それでは間にあわず、日本が沈んでしまう。職場で、家庭で、地域社会で、あらゆる場で積極的に、自ら謙虚に学びつつ、啓蒙活動を実践して欲しい。啓蒙といっても大言壮語する必要などない。正しいこと

を教えるのではなく、答のないことを一緒に悩み会い、議論するほうが良い。地道な場所で地道なことを照れずに展開すればよい。知的空間を復権させることが健全な社会を取り戻す王道である。漸く日本でも流行になったマイケル・サンデル教授も毎日の家庭の食卓で、ニュースや学校での出来事を題材に、何が正しいか話し合ってきている。家庭がやりやすい出発点かもしれない。刺激に条件反射する動物でなく、人間になるには、身近なところに知的空間を作っていくなくてはならない。各グループの所属会員がこんなことをやったら、こういう知的空間が再生できましたという面白い実例があれば、グループ活動報告等で共有して頂ければ幸いである。

(5) 研究会員、本会員、OB 会員の三位一体運営は、これを踏襲する。徒に制度改革する移行コストを回避したいし、今夏の夏季研修会の成功をみても先達の卓見は証明されている。この機会に、改めて、上原代表をはじめとする前幹事団、吉田専務率いる事務局、そして、先輩達のこれまでのご尽力に心より御礼申し上げたい。

三位一体の効用は、合理的運営、相乗効果と多々、存在するが、何よりも、先輩の経験に学び、若人の活力を頂くことにある。グループ活動等の講師でも、気軽に先輩の投入も検討してもらえればよい。ニーズとご都合があえば、喜んで手伝って下さるはずである。よくグループの合同開催はあるが、各グループが、勝手に、研究会やOB会と連携することも、誰も止めていない。

4. グループ活動以外に総会、夏季研修会、合同月例会、サロン、トップ懇談会、親子対談等、様々な活動が展開されており、担当幹事、事務局が一所懸命、アレンジしてくれている。なかなかお目にかかれないような方々のお話を拝聴する機会も少なくない。全員参加が前提の総会、夏季研修会はもとより、合同月例会、サロン等にも積極的に参加して頂きたい。

5. 浩志会に入って良かった、人生に非常に有意義な価値を与えてくれた、とあってほしい。そのために、幹事団は、一層の活動活性化のために努力していく。我々お互い職務において多忙である。活動の合理化、効率化にも努めていく。しかし、幹事団はあくまで触媒であり、主人公は本会員ひとりひとりである。全員参加の浩志会は会員ひとりひとりの意思と行動ではじめて実現される。ひとりひとりの営みが相俟って、益々、お互い楽しい場となり、更に参加の誘因が高まる。参加が広がって活動が大きくかつ多様となり、もっと楽しくなって良きサイクルが始まる。否、先輩たちのお陰で、既に好循環が始まっている。

本会員の皆様方の積極的な活動参加を楽しみにお待ちしております。何卒宜しくご協力賜りますようお願い申し上げます。